

群馬県におけるクマの検体分析結果（2012年度）

姉崎智子（群馬県立自然史博物館）

1. はじめに

群馬県では、2000年代後半になってから、2006(H18)年、2010(H22)年、2012(H24)年と数年単位でツキノワグマの人里への出没が多い年がありました(図1)。なかでも、2012年は、2006年に次ぐ多さの捕獲数を記録しています。出没にともなう捕殺数の変動が、個体群にどのような影響を与えるのかについて把握するには、その動物種の食性や繁殖状況など生息状況に関するデータを長期的に蓄積する必要があります。そのため、群馬県では1998(H10)年度より捕獲個体の分析を行ってきました。ここでは、2012年度の分析結果について報告します。

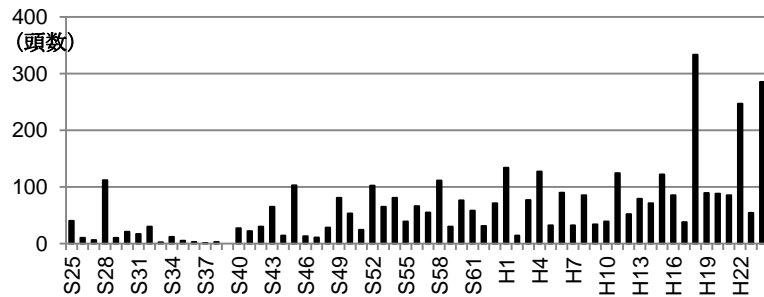


図1 群馬県における有害捕獲頭数の推移

2. 調査方法

(1) 情報の収集

県鳥獣保護員のパトロール日誌に基づき、クマの目撃地点の把握を行いました。

(2) 検体分析

検体は捕獲地点、体重、体長などの個体情報を記録した後、剖検し、死亡年齢の査定、繁殖状況の確認、食性分析を行いました。

3. 結果

(1) 鳥獣保護員報告

2010年度と2011年度の鳥獣保護員の報告では、クマが目撃されたり、痕跡がみつかったりする地点に大きな差異は認められませんでした。しかし、2012年度は谷筋や低地への広がりが確認されました(図2)。

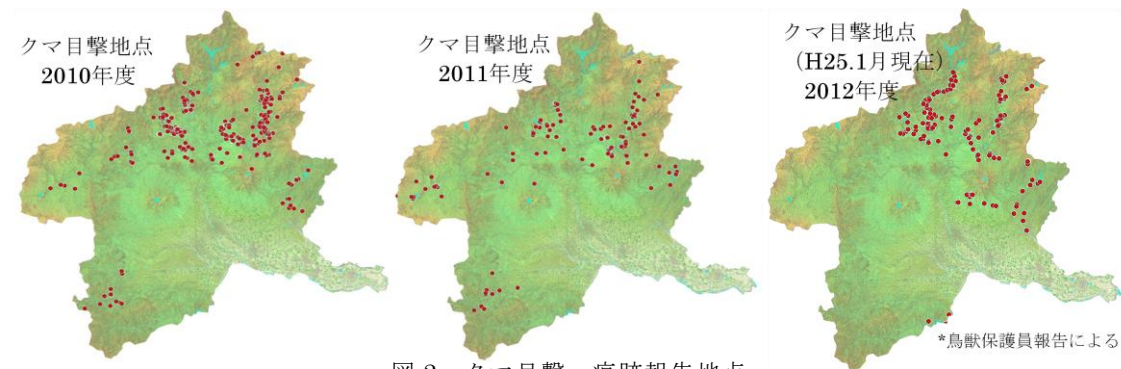


図2 クマ目撃・痕跡報告地点

(2) 検体分析

2012年度は、オス、メスともに2011年度に比べて4歳以上の個体が多く認められました(図4)。とくに、メスではその傾向が強く、60%以上を4歳以上のクマが占める結果となりました。これは、人里への出没が多かった2010年、2006年の傾向と類似します。

また、食性分析では、5月に草本類が多く確認され、その割合は8月にかけて減少する傾向が認められました(図5)。6月にはトウモロコシが認められ、9月にかけて増加しました。7月、8月、9月にコメが確認されました。コメの摂食は過去にも複数の市町村で確認されていることから、広い地域で摂食の対象となっていることが伺えます。

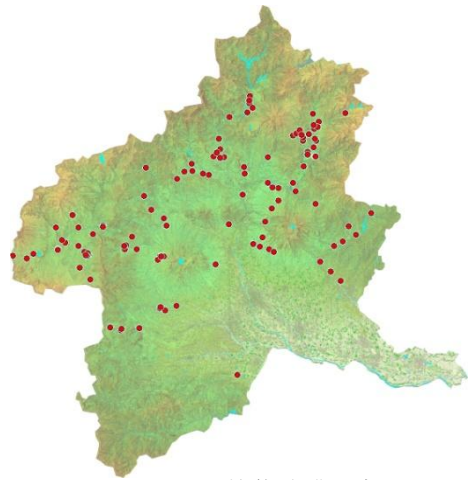


図3 クマ検体捕獲地点

4. おわりに

クマが人里に多く出没する年には、4歳以上のメスが多く捕獲される傾向があり、その食性は春先を除いて農作物が主体であることが確認されました。人里で多く出没する年に、繁殖可能な個体が多く捕獲される傾向は、今後、その頻度が増加した場合、個体群への影響が懸念されます。クマが人里に多く出没する背景には、秋の食糧不足のみならず、中山間地域の社会環境の変化もその要因と考えられています。現時点では、検体からの情報のみですが、詳細な議論を行うには環境要因も含めた調査も継続して行う必要があります。

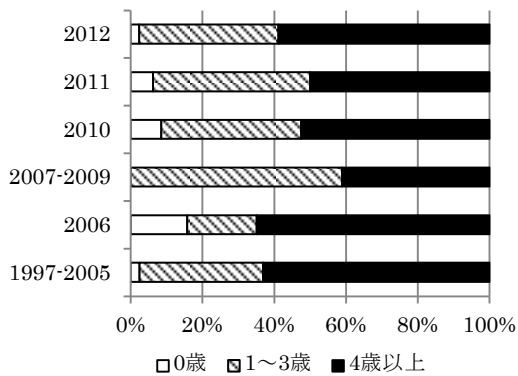


図4-1 クマ年齢構成・オス

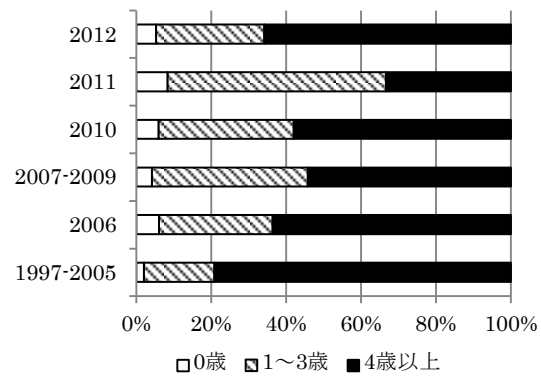


図4-2 クマ年齢構成・メス

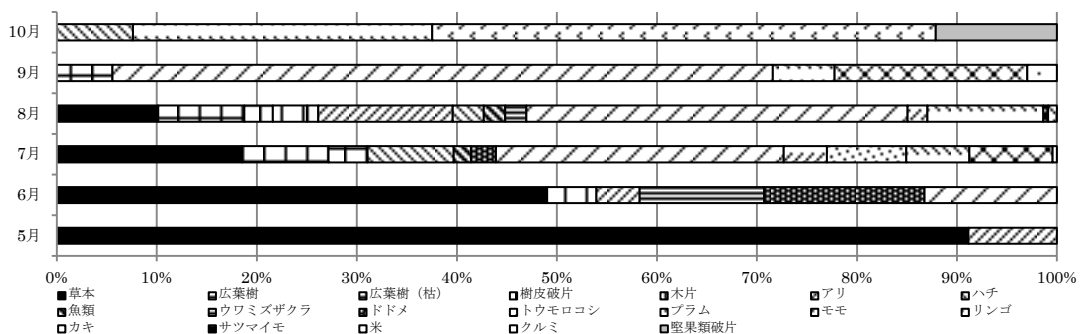


図5 クマ胃内容物分析結果